

白鶴コレクションに寄り添えた幸せ

山中 理（白鶴美術館）

白鶴美術館に勤め始めて何年間は、上司の指示に従って展示作業を行うだけでしたが、その方が大学に移られてからは、結局、浅学非才な身にも関わらず、見よう見まねで春秋2季、20年以上の長きに亘って展覧会を構成して参りました。但し、その展覧会は毎回タイトルの目先を変えるだけの常設展示に近いもので、実体は限られた数の館蔵品を並べ替えることの繰り返しでした。必然的に同じ作品を何度も見つめることとなります。凡庸な私がそれらに潜む凄さに気付くまでには、そこそこ時間が掛かりましたけれども、そこには汲めども尽きない泉のような豊潤なものが含まれていました。

例えば、唐時代の銀器「鍍金狩獵文六花形銀杯」（高5.4cm 口径8.7cm 重要文化財）の1曲面には、下半身に矢を射込まれて倒れた鹿の姿が表されています。この鹿はいかにも苦しげに頸を反らし、口を開けて舌を見せています。恐らく断末魔の悲鳴をあげているのでしょう。実はこの鹿、実寸で約1.5cm位の大きさです。従って、舌は1、2mmの幅で表されているのです。細密描写に適した面相筆で描くのは異なり、銀板の表面を金槌とタガネを使って蹴るように彫って行く、いわゆる蹴り彫りでこのような表現が可能とは、信じられない思いでした。何度見ても感動し、「ウーン」と唸ってしまいます。習得した確かな技巧を駆使することで、表現する対象を工人がどのように見つめているのかまで知らしめてくれたのです。私が金工作品を奥深いものとして認識し始めるキッカケとなりました。このちょっとした「おやっ？」という気付きを出発点として、まさに虫の目に終始し、体系だった考察に至ることなく、館蔵品の商（殷）周青銅器、唐時代銀器・鏡、宋～明時代の陶磁器、奈良・平安時代の経巻、鎌倉～江戸時代の絵画等、更に他で出会った作品を見つめ続け、今日に至りました。

さて、展覧会の会期中はほぼ毎日、展示室に行きます。何しろ少人数で運営していますので、看視の非常勤職員の昼食やお茶の時間には、交替要員として展示室の椅子に座り、素晴らしい作品に囲まれながら、下らない文章を綴ったり、本を読んだりして過ごしています。来館される方が少ないから可能なのですが、世の中広しと言えども、これほどの書齋を持っている人はいないでしょう。勿論、お客様からご質問があれば、即座に対応できますので、とても便利です。

自己満足にしか過ぎないかもしれませんが、白鶴コレクションに身近に寄り添う中で、優れた作品が持つ首尾一貫性・整合性を、身体が震えるほどの感激を持って実感し続けて来ました。美術作品から感得しましたささやかですが貴重なものを、来館者の方々と一緒に味わう喜びを大切にしたいと願っています。